

激動の平成，そしてこれから

原村 嘉彦*

Heisei, era of significant change, and tomorrow

Yoshihiko HARAMURA*

5月に改元があり時代が平成から令和に代わった。地震や大雨など災害が多かった平成年間であったが、工学部関連部署も大きく変化した。この機会に平成の30年を振り返ってみよう。

先ず大学院である。工学研究科は、平成2年に博士課程を設置し、平成年間に65名の課程博士、26名の論文博士を輩出してきた。平成15年には入学定員を前期課程合計で195名、後期課程合計で30名とし、学生の受け入れ枠を増やした。平成17年から20年の前期課程各専攻の修了者が、入学定員の95~73%になるなど、定員充足にもう少しの域まで健闘したものの、その後、入学者の伸び悩みがあり、平成27年度に行われた大学評価で、収容定員に対する在籍学生数比率が前期課程で0.46、後期課程で0.09と低く改善が望まれるという指摘を受けた。工学研究科では、横澤勉委員長の下、この指摘に対応し、工学部・工学研究科の将来の発展を睨んで、建築学専攻を除いた部分について、大幅な組織改革を行った。その実施が、くしくも平成の最後の年度初めである平成31年4月に行われた。その内容は、(1)学部の再編も見据え、境界領域の教育・研究を重視する専攻の統合、(2)教室系教員の大学院教育への本格的参入、(3)定員の削減(入学定員:前期150名、後期14名)、の3つからなる。なお、経営工学専攻の増設も平成の初期であった。

学部では、学科名称変更と、学部再編案作りが行われるとともに、任期制の助手・助教制度への移行など、いくつかの改革が試みられた。平成6年には経営工学科に、平成18年には電子情報フロンティア学科、物質生命化学科、情報システム創成学科に、平成24年には電気電子情報工学科に名称を変えてきた。一方学部再編として、西久保忠臣学部長時代の平成18年に第二工学部の募集を停止した。佐藤祐一学部長時代には、数理工学科とロボットメカトロニクス学科の新設の提案(平成19年、実現せず)が、庄司正弘学部長時代には、理学部の数理物理学科の新設に協力する形で数学教室の7名が理学部に移籍、経営工学科と総合工学プログラムの新設の提案(平成24年に実施)が、林憲玉学部長の第1期には、1学科に統合する提案(平成27年5月、教授会否決)が、現在の林憲玉学部長の第3期には、建築学科を学部として独立させその他の学科を1学科へ統合する案(現在細部の検討中)が提案された。

教育改革の一環として、平成15年度には、西久保忠臣工学部長の指揮の下、工学部独自の外部評価を行った。さらに平成16年に応用化学科(当時)が、平成17年には他の4学科すべてがJABEE(日本技術者教育認定機構)の審査を受け、認定を獲得した。

平成18年には、「実員の定員化」として、工学部の入学定員を720から870に変更した。その後平成24年には数学教室の教員移籍に伴って入学定員を850削減(理学部へ移行)して現在に至っている。免震装置を設備した23号館が竣工し、主に4号館から23号館に工学部の過半数の研究室が移転したのも平成(12年)である。

人事制度としても、従来から問題となっていた高齢助手の問題を解決するために、平成14年から、新たに任用する定数外教員を任期制の助手である特別助手(その後特別助教も加わる)とする制度を工学部主導で導入した。

このように、平成の30年間、外的要因もあり、本学部は様々な変革に向けた取り組みをしてきた。ただ、本学部が社会から求められている役割に対して、まだやりきれていないことがあるように思う。本学は、教員の研究に裏打ちされた教育を目指している。紙面の都合で割愛したが、教員の意識の高さもあって、多くの教員によって優れた研究がなされている。一方で、私学である以上、教育が使命である。そして最近では、大学教育の本来の姿とは違う、手取り足取りで教育する必要性が増してきている。入学者の能力に対応し、時代に合った卒業生を輩出するために何を指すのか、各教育単位で真剣に議論することが必要だろう。学生の多様性に応じた教育をすることは望ましいが、人的資源をどこまで投入できるかを併せて検討しておかなければ、絵に描いた餅になる。現在進んでいる学科再編案が固まった暁には、これを是非進めて行きたいものだ。

さらに、上述の任期制教員制度は、これを導入したときには想定しなかった社会の動きによって、制度の趣旨に沿わない運用に変化してきている。研究活動の発信を活性化する上でも、この半数程度を研究室を主宰する任期のない教員に格上げするような制度改革が解決策の一つである。全学的な合意に向けてのハードルは高いが、工学部をより良い方向に向かわせることにつながると思う。

*工学研究科委員会委員長，教授 機械工学科
Dean of Graduate School of Engineering,
Professor, Dept. of Mechanical Engineering